



巻 頭 言

乾 直 体 験 40 年

財団法人 日本植物調節剤研究協会 評議員
近畿・中国・四国 支部長

西尾隆雄

今年の転作に飼料稲を取り入れようと考えています。別に牛に食わせようという訳ではなくて年来の悲願である乾田型直播稲作の工夫をしようというのです。

〈兼業農家私の直播史〉

私が農業試験場で水稻の直播栽培の試験を始めたのは1960年でした。その数年後から、試験成果を確認したくて自家水田でも乾田直播のイネも作り続けました。『試験は試験場でやってほしい』と家族なる抵抗勢力が常に強力でしたから、わが家の中では不合格だった訳です。一年だけ『これならよろしい』という評価でしたが、この年は私の畢生の力作の栽培型が順調に経過しました。その他の年の失敗の原因は圃場の均平が並み以上に不十分のままであったり、無理な作業日程に終始したこと、そして機械力を整備しなかったことです。基本を怠ったからではありますが、兼業農家で成り立つ技術であるか、それも確かめたかったのです。

そしてついにこの2年直播をやめました。落籽の発芽に参ったからですが、やめてみるとあらためて機械移植栽培の安定性、省力を思い知るという訳です。

〈田植栽培並の省力安定を〉

平成になってからも直播への期待は大きく、試験研究も活発のようですが、農家の間では今一つ往年の盛り上がりを欠くようです。省力技術としては、機械田植が定着して直播の存在意義が薄くなったからでしょうか。

一般的な農家感覚からは外れますが、乾田直播で水田を乾田化し、水田利用をいろんな意味でよくしたいので私は直播に拘ります。思いを遂げるには、田植機稲作にまけない簡便低コストであることが必要と思います。

米代も安いことですから機械への投資には消極的で、種まきは散播か、一部の試験場が考える手持ちの田植機利用、除草は畔から投げこむジャンボ剤ということになってくれば直播による『水田利用の構造改革』も歩き始めるのでないかと期待するのです。

〈一中山間農家の思い〉

その構想に私なりに挑もうというのが冒頭に述べた転作田の利用です。私は中山間農村に住んでいるのですが、山裾の水田にはイノシシが出没して農作物を荒らします。溜め池は傷んでしまいました。農業法人も敬遠します。村の人は一挙に耕作放棄をして転作割り当て面積消化に役立てています。ところが草の管理には何と言っても、水を張って稲を植えて除草剤を撒くのが一番です。そこで飼料稲による直播の実験実習というわけです。

仮にこの構想に現実性が見える時には、除草剤の開発にも新たな展開が求めたくなることでしょう。

〈食糧は自給の原則を〉

それにしても世界経済の仕組みには疑問を持たざるを得ません。農業国の経済が発展するとその国の農業が怪しくなります。そして成長産業は空洞化が進み雇傭不安がおこります。

一生懸命稲作の進歩に努力する。米代は安くなる。稲作農業が立ち行かなくなる。除草剤開発の努力もむなしくなってしまう。そんなことはないでしょうがこんな図式を妄想して、怯えを覚えるのは残念でなりません。

「この秋は雨か嵐か知らねども今日の務めの田草とるなり」といった努力を、安んじて続けられる世界経済の仕組みを何としても望みたいと思うのです。